



知れば知るほど、 人間社会うつて うまくできている。 その発見が、 ものすごく楽しい。

社会人類学者

増田 研
(環境科学部 准教授)

異文化を研究する学問

世界中の多様な文化を研究する社会人類学。人間を社会的な行動や文化の面から明らかにしようとする学問で、19世紀のイギリスではじまりました。当時のイギリスは世界各地に植民地を拡大させるために、アフリカやアジアなど、ヨーロッパとは全く異なる社会のしくみや文化を調べる必要があったのです」と話すのは環境科学部の増田研先生。

こつした異文化を研究するときの大切な視点のひとつとなるのが、その社会固有の規則を解明することだといいます。「私たち人間社会は、文化的な約束ごと

や決まり、しきたりといった規則がなければ成り立ちません。その在り方によって社会のしくみも変わるからです。そのため人類学者たちは、現地に長期滞在し、人々の暮らしと深く関わり合いながら、食生活、生産活動、家族のつくり方、芸術、言語などを調査・研究するのです。

全人類共通の普遍的なこと

世界には、もつと自然に寄り添った独自の文化の中で暮らす人々もいます。こつした異なる文化に生きる人々が、一見自分たちとは全く違うように思えても、基本的なところでは全人類に共通する普遍的なものがあります。」

環境科学部 准教授
増田 研 Masuda Ken
1968年横浜市生まれ。1992年成城大学文芸学部文化史学科卒業。1998年東京都立大学大学院社会科学研究所社会人類学専攻博士課程修了。(財)民族学振興会研究員、神奈川大学日本常民文化研究所研究員を経て、2004年より現職。専門分野は社会人類学、エチオピア民族誌。社会人類学博士。

パングラデシュの首都ダッカで、渡し船に乗る増田先生。昨年度、大学院国際健康開発研究所の研究指導に訪れたときのもの。撮影は指導学生の尾崎里恵さん。

その一例が、贈り物です。「どんな社会でも、贈ったり、贈られたりという交換関係によって人はつながり、関係を築き、社会のベースをつくっていくのです。ただし、贈り物のやり方や考え方は、その国や地域の文化によって異なります。たとえば、日本だとお中元、お歳暮という季節ごとの贈答の習慣がありますが、外国にはありませんよね。また、誰かと一緒に食事をする際におこることに価値を置く文化もあれば、割り勘を良しとする文化もあります」。

増田先生はこの分野における研究の魅力について、「こう言います。「自分たちの文化の違いが見えたら面白い。また、知れば知るほど、いろいろなものつながりが見えてきて、それぞれの人間社会がうまくできているのを感じます。そんなことを一つひとつ発見していくのがものすごく楽しいですね」。

エチオピアの少数民族バンナ

増田先生は1993年以来、アフリカはエチオピア南西部の少数民族バンナの研究を行ってきました。

バンナの人々が住む地域へは、首都アディスアベバから、車でさらに3日間ほどかかります。標高1,500メートルの山地に住む彼らは、主に牧畜と雑穀栽培を基盤とした自給自足の生活を送っていて、電気やガスはありません。

初めてバンナを訪れたとき、増田先生はエチオピアの公用語であるアムハラ語を学んで現地入りしました。しかし、彼らが話すのはバンナ語アムハラ語がわかる一部の人手掛かりに、徐々にバンナ



年齢の序列を重んじるバンナ社会。村人が集って焼き肉を食べるとき、男たちは年齢順に横一列になって食べる。向こう側の端が最長老。



バンナの若者。額の赤い顔料は、バッファロー狩りに成功したことを示している。



乾いた川底を歩くウシの群れ。この地域の川に水が流れるのは年に数日だけ。普段はこの川底を掘り、湧き出た水を与える。



バンナの既婚女性の典型的なファッション。

語を憶えていきました。「バンナ語には文字がありません。だから、彼らは記憶力がとてもいい。会話も達者でしよう。う、おしゃべりをしています。歌が大好きで、女性も声がきれいで、音声による「ミニケーション」がとても発達しています」。

また、長期滞在で見えてきたバンナの規則のひとつが、年齢による相対的な序列です。「一人ひとり、何年に生まれたかは明確ではありませんが、あの人より後に生まれた、この人より先に生まれたという順番が重視されます。そうして、バンナ社会における自分の位置づけを確認しているのです」。

基地の街で過ごした少年時代

横浜市出身、子供時代から大学生の頃までは相模原市にある米軍基地のすぐそばに住んでいました。世界のどこかで起きている戦争のために、米軍の戦闘機が上空を飛んでいく、という光景を間近に見て育った少年時代。1989年、東西冷戦が終わったとき、「これで世界は平和になる」と、心底ほっとしたといいます。「残念ながらその後、戦争がなくなることはありませんでした」。

「両親が音楽好きだったことから、ピアノ、オルガン、エレキトーン、バイオリン、三味線など、いろいろな楽器のある家で育ちました。小さい頃は音楽より、むしろ野球を頑張っていましたね。音楽に興味を持つようになったのは小学5年生の頃からで、クラシック音楽を熱心に聴きました。これをきっかけに楽譜を見ながら音楽を聴くのが楽しくなってきました。ピアノを弾くようになりました」。

不登校、そして高校中退

高校は、地元でも屈指の進学校に入學したが、1年生の半ばくらいから授業に出なくなりました。「学校での勉強が面白くなかったのです」。多感な時期の複雑な心境を他人に話すのは容易なことではありません。それから一年半ほどの不登校を経て高校を中退。大学へは、大学入學資格検定試験で受験資格を得て進学しました。

増田先生は、20年以上経った今でも高校の教室にもどつた夢を見ることがあるそうです。「久しぶりに授業に出たら、何と、中間試験の日。当然、何一つ勉強していないから一問も答えられない。白紙の答案を出して家に帰るといつ……。何とも切ない夢です。でもこれは現実にあつた話。実は当時、不登校とはいっても、中学から続けていた吹奏楽の部活には熱心に出ています。授業が終わる頃に登校して練習に参加。トランペットを演奏し、楽譜も書いていました。早朝に寝て、昼過ぎに起き、学校へ行く。生活は必然的に夜型に。辺りが静まり返つたなかで本を読んだり、深夜ラジオを聴いたりするのが楽しかったですね」。

この頃、猛烈に本を読んだことが、その後の人生に大きな影響を与えました。



「憶えているのは畑正憲 (ムツゴロウ)さんのエッセイ集。自分を変えたな、と思うのは、宮坂有洪という僧侶が書いた『インド留学僧の記』という本です」。



「脱線がすごく多い」という増田先生の講義。話がアクロパティックにあっちに行ったりこっちに行ったり、それでもポイントは、はずさない。



バナナの飲み物容器。ひょうたんをくり抜いたもの。



現地の調査内容を記す「フィールドノート」と、自身の行動を記す「家計簿兼行動記録ノート」。どちらも手のひらサイズ。



この本を読んで、研究者ってすごいなあ、知らない世界がたくさんあるもんだなあ、って思いました。私が研究者の道を志すきっかけをつくった本です。



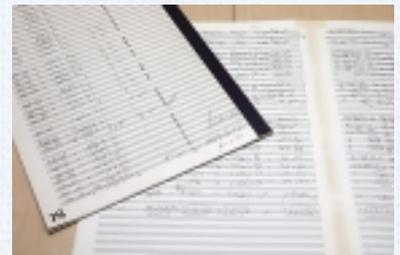
『インド留学僧の記』(宮坂有洪 著)



大学院国際健康開発研究科「国際保健学演習」のゼミ。バングラデシュやフィジーなどでフィールドワークを行った院生たちの修士論文の最終チェック中。



フィールドワークの指導のために院生とエチオピアの現地へ向かう途中。左から酒井浩子さん、現地ドライバー、尾崎里恵さん。増田先生の自画像。



20年前に書いた吹奏楽のための楽譜。五線譜が36段もある大判サイズ。当時、このサイズの五線紙は手に入りにくく、銀座の専門店まで買いに出たとか。

一方で、学校に行かないことで社会とのつながりが切れてしまいがちです。社会との接点を持つために道路工事の現場で働いたりもしました。「アルバイトをしたり、本や音楽に触れることで、どんな自分に成りうるか」を模索していた気がします。あれこれあがいた10代後半。「人は、じたばたした分だけ成長するものだと思います」。

塾講師で鍛えた講義の手腕

増田先生の講義は筋金入り。教壇に立つやいなや、巧みな言動で、その場の空気を掌握しはじめます。その手腕は、大学1年生の頃からアルバイトではじめた塾講師の経験で培ったもの。生徒たちに授業のポイントをしっかりと伝え理解させるやり方を、数年にわたって横浜の大手塾などで鍛えました。さらに大学院生の頃から、東京都立大学(当時)をはじめ複数の大学の非常勤講師もたくさんこなすようになり、授業の場数だけは、人一倍踏んでいるのです」と自負します。

最後に、今後のバナナの研究活動について尋ねると、これまでの研究は一段落ついて、最近、新しいテーマが浮上りつつあるとか。「数年前、バナナにもクリマックができたのですが、医者是不在で薬の在庫も少なく、現地の人もあまり頼りにしていません。バナナの実情にあつた医療システムを考える必要があります。このように社会の変化の中で起きる問題に対して、バナナの文化を知る者として、何か協力できる研究ができればいいなと思っています」。